

あり、

(但し此時部屋内に軍艦の繪ありたり)
男兒の云ふところ軍艦、電車、漁車、猿、鷲、
スキ等多く女兒はリボン着物前かけ、菊、櫻、
其他名所に關係あるものを云ひ出せり
以上の中にて

動物は 九八、

植物は 四六、

人工物は 一一七、

一、家庭との關係
父兄母姉戀話會等には其家族より何れも出席
し種々懇談し子供の家庭に於ける有様等よく
分りて益する所多かりき、平常と云へども其
母など時々來りて參觀す、松平、佐々木、濱
野、等の父又は母、等よく參觀す松平の如き
は最も熱心にして其注意力等につきて質問す
るなどあり、



主人と僕婢

樂 天 子

中等以上の家庭にあつては、概して父子夫婦兄弟
などの關係ばかりで、其の間に他人の混在なきた
め、比較的家政整理にも宜しく、家族團樂の趣味
も自ら得らるゝものであるが、中等以上の家庭に
あつては、是等天然の血族者の外、家令家從又は
番頭手代の類、下女下男に至るまで一家内に雑居
し、ために何れの方面にも一段の復雜を來すは勿
論、延いて家政の糜亂を招き、從つて家庭の趣味
を殺ぐ様になる、吾人は家政整理のため、且つは
家庭の圓滿を期するがため、之が豫防策を講じね
ばならぬ、而して其雇人にも通勤者あり、宿泊者
あり、其の種類に至つても千差萬別と言はぬはな
らぬが、今茲には最も範圍を狭めて、世の主人て
ふ者と終日同居して、最も密接の關係を有する、
雇人中の雇人ともいふべき僕婢に就て陳べん。
主人と僕婢の關係たる、僕婢の欠點を吹聴せざる

主人も少なかるべく、又主人を悪口せざる奴婢も少き世の中なれば、一應兩者の調和は極めてむづがしきやうである、併しそのむづがしいのは兩者自ら招くのであつて、本來左程むづがしいのではない、要するに今日主僕の關係の圓滿ならぬのは多くは相互の我利我欲にあらすば、新舊兩思想の衝突より来る目前主義に來りしものと思ふ、つまり主人の頑酷奴婢の專横は其根本であつて、相互の道徳心殊に同情心さへ發達したならばいゝ筈であるが、今茲に便宜上、兩者の本務を記して一般の參考とせん。

抑々奴婢なるものは、契約によつて主人に仕ふるものであれば、之を家族視するの必要はないやうだが、使役する主人一家に關係する所の尠少でないといふ點より自ら家族の如き待遇をせねばならぬことゝなる、即ち主人が奴婢に對する本務の極めて重きを知らねばならぬ、蓋し奴婢は主人の爲に内外の業務を執るものであつて、之が善惡は大に主家の經濟上に影響を與ふべく、又奴婢は父母兄弟と同じく、其家の子女に密接しその教育上

大に影響を與ふる所少なからぬものであるから、主人たるものは之を雇ひ入るゝに當つて出來得る限り適任者を選択して一家に害を與ふることなきことを期せねばならぬ、此に於て選擇の必要があるのである。

既に選擇して奴婢を雇ひ入れた後に於ては、給料食料、居所等に於て相當のものを給せねばならぬは勿論、能くこれを統御し、管理し、憐愛し、奴婢をして其職に怠らしめず、又喜んで一家の用を爲さしむる様計らねばならぬ、是に於て統御の必要があるのである。

斯く主人にありては選擇統御の必要あるを以て、之が運用を自由とせんとするには、須く監督と信用の寛嚴を失せぬ様勉めねばならぬ、若し主人にして監督の實を擧ぐる事が出來なかつたならば、遂に奴婢のために欺かるゝことあるべく、又信用を重んぜざる時は、遂に自ら欺かしむるやうになるのである、されば主人 奴婢に對して、常に選擇と統御の本務あることを了し、其の監督と信用との偏廢せざることを注意し、ために奴婢に向

つて殘忍苛酷の處置に出でぬ様務め、僕婢をして常に主人に心服して其本務を盡すことを心掛けしめねばならぬ。常に世の主人なるものを見るに男子は大抵外出を以て日を終へ、女子は終日家居して僕婢を使役するものなるに其女子即ち一家の主婦にして、一知半解の教育によりて理性の力に乏しく而も舊式の莊重なる家庭教育もなき者多く、しかも傲然として主人風を吹し壓制的に世の可憐の老幼子女を支配せんとして居る、斯る心掛けでどうして活きたる人の子を使ひおぼすことが出来やう、諺に曰く人を使ふは使はるゝ心持で使へとこれ人間使用法千古の格言である、其の金錢上に於ても、勞働上に於ても、なるだけ自他の差別をしない、誠心誠意を以て之に臨み、加ふるに之を制するだけの威徳を以てしたならば如何なる僕婢にても必らず主人に心服して働くものであら、それ僕婢は一家の家族と同じく、主人より托せられて、日常須要品の買入等をなすばかりでなく、特に商業家、製造家の如きにあつては、往々其物品金錢の買出納を掌るものであれば、須く其

私欲を抑制し、常に不正の舉動なき様に誓ひ以て主家の繁榮を計らねばならぬ、總じて主家の要件、其子女の家庭教育の上に於ても誠心誠意に對し、注意周到でなければならぬ、是れ僕婢に誠實の本務を第一となす所以である。以上の如く、世の僕婢たるものにして、假令誠實律直の念ありと雖も、其分限を忘れ若し專恣の行あるに至つては、大に一家の和平を亂すものである、故に僕婢は常に主人の指揮に従ひ、之れに服従の念を持して奉仕せねばならぬ、是れ僕婢に服従の本務を第二となす所以である。又主家の繁榮を欲するの念切なれば、勢ひ成るべきだけ勤績すべきものである、固より相互の都合によれど勤績の年限永きときは、自然主家のために家族視せらるゝの度深く爲めに相互の利便を來すものであるこれ勤績を以て主家に對する本務の第三とする所以である。余常に世の僕婢たるものを見るに、多くは自己の本分を忘れて猥に悪しき僻見を持し、我も人なり彼れも人なりとして、毫も社會の秩序を顧みず、

主家の正當なる命令をも之を殘酷なりと思ひ、殊に近年奴婢の需要の供給に超過せるを奇禍とし、やゝもすれば主家を輕侮し、主人を罵詈訛、今日東家にありと見れば明日西家に仕ふて遂に身の置き所なきに至る、蓋し自ら招く所とは言へまことに慨嘆の至である。

主人と奴婢との本務凡そ以上の如くであるが尙ほ一言添ふべき事がある。それ主人の奴婢に對する本務は一家の主人ばかりでなく、一家の家族も皆之に對して主人に準せる本務がある、固より其家の子女は、主人の如き選擇統御の本務はないが、之に對し信用指揮の本務があつて、猥りに之を器械視して奴婢を玩弄し、または浴遇することゝ事あつてはならぬ、之と同時に奴婢は一家の老人子女等に對し、主人に準せる尊敬と忠實とを以て之に仕へ決して陰にあつて之を苛遣する等の所爲があつてはならぬ、

玩具店を開きて以來の余が感想

フレイベル館主 高市次郎

●教育的玩具趣味と骨董的玩具趣味
玩具の變遷を調べて或は二百年前の玩具を地中より掘り出したとか何々様の御愛翫になつたものだとかと云ふことに非常に趣味を持つ人もあり或は各地の玩具を集めて何處の人形だとか何處のの笛だとかと云ふことに興味をもつて研究する人もあり或は此の玩具は西洋の何を模造したとか此の玩具には如何なる歴史があつて如何なる時勢が動悸となつて出来たとかと云ふ様なことに趣味をもつて居る人もある此等の人が來られて是は面白い事は珍らしい是は有益だと云ふことが各人の趣味に適當したるものでなければならぬから各々異つてをる余が是迄經驗した處によると玩具に趣味のある人、玩具の狂人、玩具研究者玩具の蒐集者と云ふ様な人は大概此の種類の人々であると思ふ此等の趣味此等の研究は固より大人としては興味